

国王のイメージ戦略(1)

—ルイ14世とヘラクレス—

Strategy of King's image (1)
— Louis XIV and Hercules —

榎本 恵子¹

¹大妻女子大学文学部

Keiko Enomoto¹

¹Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：17世紀，フランス，国王のイメージ製作，ルイ14世，ヘラクレス

Key words：17th century, France, Fashioning King's image, Louis XIV, Hercules

抄録

本研究の目的は太陽王と呼ばれていたルイ14世のヘラクレスとしての表象についてその実態を明らかにすることである。

17世紀フランスを治世したルイ14世は、太陽王としての異名で知られるが、対外政策として顕示した雄姿にはギリシャ神話の英雄ヘラクレスに表象されるものもあった。そこで、フランスにおいて国王のイメージがどのように製作されるのか、ヘラクレスがフランス国王の表象として選ばれた背景及びそれがどのようにルイ14世のイメージ戦略に適用されたのか調査・考察した。

本稿はパリ市内、ヴェルサイユ宮殿、ルーヴル美術館、マザリーヌ図書館に現存するルイ14世の資料、オペラ『恋するヘラクレス』と喜劇『アンフィトリオン』の分析から浮き彫りになったルイ14世のイメージ戦略についての調査報告である。

序論

ヴォルテールによって偉大なる世紀と命名された17世紀フランスを統治した絶対君主、ルイ14世(1638–1715)は太陽王の異名を持っていた。

彼は、演劇や音楽を愛し自らアポロンに扮して踊った。その一方で彼の対外政策として多くの戦争で顕示した雄姿には、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスの姿をしたものが多くある。

そこで、パリ市内に現存するルイ14世を語る建造物、ヴェルサイユ宮殿の中と庭園、マザリーヌ図書館とそこに眠る当時の書物、ルーヴル美術館に眠るルイ14世の跡をたどった。

本研究は、フランスにおける国王のイメージ製作とその戦略を検証し、ルイ14世のイメージ戦略を浮き彫りにすることであり、ヘラクレスを表象に選んだルイ14世の真意を探ることである。

国王のイメージ戦略は、史学的、政治的視点か

ら検証されることの多い分野であるが、それを文学というフィルターを通して検証を試みた。ルイ14世がそのイメージを変えるときは、為政の節目に重なり、それは文学作品が多いに関わっている。そして、ヘラクレスはルイ14世が親政を開始した時期と重なっているのである。

そこでルイ14世がヘラクレスに表象されることの意味を二つの作品、オペラ『恋するヘラクレス』と喜劇『アンフィトリオン』から考察した。本研究は平成29年度大妻女子大学戦略的個人研究費(S2919)の助成を受けたものである。この二つの作品の考察を中心とした研究成果は首都大学東京人文科学研究科紀要『人文学報』(2018)に発表した[1]。本稿では、その概略をまとめ、本研究の有用性及び今後の課題を提示し、研究報告としたい。

1. 国王のイメージ製作とヘラクレス

「国王のイメージは王国のイメージである」というように王国が持つ意味、国家の概念のイメージである[2].

視覚的イメージとしては肖像画、彫像、タペストリー、メダル、絵画、記念碑、メダルなどがある。それらの第一の役割は、国王称賛であり、そこに表象される神々や英雄は雄弁にその権力と覇者の魅力を語る。

勝利の表現として古代ローマが選ばれ、歴代の国王は、古代ローマ風の鎧かぶとに身を包む。また、歴史上の人物としてはアレクサンドル大王やシーザー、神々としては軍神マルス、ジュピター、神格化されたヘラクレスが多く選ばれる。国王フランソワ一世、アンリ2世、アンリ4世、ルイ13世とヘラクレスの姿で表象されていた。

ヘラクレスが選ばれる理由には3点あった。一つは彼の出生である。歴代フランス国王は大神ジュピターに表象されることもあったが、ヘラクレスはその大神と貞淑で徳の高いアルクメーンとの息子である。若き国王がジュピターの息子ヘラクレスとして表象されるとき、彼の王位継承がそこに確実なものとなるのである。

またヘラクレスの克服した12の功業は勇敢な国王の資質を提示している。覇者ヘラクレスとその足元に踏みつけられるヒュドラは政治的、宗教的な面においての国王の優位性を表象する。例えば口ひげをつけ、髪を長くなびかせた裸身に、足元の獅子と7つの首を持ったヒュドラを打ちのめすべく棍棒を振りかざしたヘラクレス=ルイ13世の姿は幼きルイ14世に潜在的に自分の未来の姿を見ていたと想定することができる[3].

2. ルイ14世のイメージ戦略

ルイ14世はピーター・バークによると意識して王の役割を演じていた[4]. そして「表象する」とは「表現すること」であり、「代表する」ことである。つまりルイ14世が選んだ表象は、その表象者がルイ14世の代わりに彼の望むイメージを代弁することである。表象するということは、実物は表象よりも弱いものであるが、その姿を借りることで実物をより偉大に見せ、いつしかそれと同等なものへと押し上げてくれる。ルイ14世が少年のころ、「夜のバレエ」で太陽神アポロンに扮し、踊る時ちょうど背後から朝日が差し込み、まるでル

イ14世の治世の始まりを象徴したかのように、である。

こうしてルイ14世はアポロンに表象されることが多いのだが、歴史的過去の担い手聖王ルイ、クローヴィス、シャルルマーニュまたキリストとも同一視された。国を統治するいわば神の代理人であり、民を導くよき羊飼いととしてのイメージだ。ルイ14世はアポロンのほかに次々にイメージを変えていく。意図してか、無意識の必然か、それは彼の政治的転換期に起こると言ってよい。彼は自ら「表象」することでそれを示していったのである。

3. ヘラクレスに象徴されるルイ14世

その第一段階が、ヘラクレスである。絵画にもヘラクレスに見立てられたルイ14世の姿を見ることができるが、1662年、フランチェスコ・カヴァッリのオペラ『恋するヘラクレス』のヘラクレス、そして1668年、モリエールの『アンフィトリオン』のジュピターがルイ14世をイメージとして作られた。そしてこれらの上演された年はルイ14世の親政開始のターニングポイントであった。

『恋するヘラクレス』の中では、力の象徴としてのヘラクレス、恋するヘラクレスが描かれている。力の象徴としては、次の二つを見ることができる。ヘラクレスが打ち勝った難題をフロンドの乱と捉えれば、乱が収まり、絶対君主制への道を進めている中で、1654年ランスで生成式を執り行い正式に王位継承をし、1660年スペインの王女と結婚することで対外的にも権力を得たことで若き国王が名実ともに誕生したことを意味する。

イオレーに振り向いてもらえなかったヘラクレスの姿は愛していたマリ・ド・マンチーニとの仲を引き裂かれたルイ14世を、そしてディアネイラという妻がありながら他の女性を愛してしまったことはラ・ヴァリエール嬢を愛妾としていたことの暗喩と取ることができる。同時にこれから多くの愛妾を持つことになる国王の恋の覇者としてのイメージを表象している。また、天に上げられ神格化されたヘラクレスがオペラの最後に現れ、地上にいるもう一人のヘラクレスがこれから美しい美の女神と結婚することを告知した時、観客はヘラクレスに表象された若き国王ルイ14世が、スペインの王女を娶り、ハプスブルク家を始めとするヨーロッパを手中に収めるであろうことの予言と

受け止めたであろう。

『アンフィトリオン』に描かれたジュピターはルイ 14 世としてなぞらえられる。ルイ 14 世の新たな愛人モンテスパン夫人とのことが話題となっていた時期であったからである。恋多きジュピターがそのままルイ 14 世に重なる。

歴代のフランス国王を表象したヘラクレスは 17 世紀、さらに偉大になり半神から神へと神格化されたのである。

結論

このようにしてみると、国王を表象して描かれた肖像、彫像、絵画が語る以上に、文学作品は雄弁に語り、そのイメージ政策に貢献している。

作品を分析するとき、著者と作品、ストーリーと主題を分析することが多い。作品は著者の明確なあるいは隠喩的なメッセージが込められているからである。しかし、そこに為政者の成長の記録を見ると、作品も国王のイメージ製作の一端を担っていることが見えてくる。さらにパリ市内に点在するルイ 14 世の偉業を物語った建造物、ヴェルサイユ宮殿に溢れる様々な媒体を生で見ると、歴史書や文学作品は、乾いた過去の記述や過去の作品という遺物ではなく、我々と同じこの地にいた生身のルイ 14 世の存在に息苦しいほどの威圧感と共に我々を圧倒するのである。

ルイ 14 世のイメージ製作とその戦略、及びイメージの変遷を文化的、政治的側面を鳥瞰的にみることで、個々の分野だけでは見えなかったこの時代の偉大さが浮き彫りにされることが明かである。

本研究は、ルイ 14 世の時代を包括するヴェルサイユ宮殿を併せて考え、現代におけるフランス 17 世紀とルイ 14 世の持つ意味を考え直す必然性を提示した研究であると捉えている。それはひいては、アメリカのトランプ大統領、フランスのマクロン大統領のイメージ戦略といった「政治の芸術化」「芸術の政治化」の原点としての考察を導く一端となるのではないか。

謝辞

現地調査を滞りなく進められるよう協力をしてくれたマザリーヌ図書館館長、ヴェルサイユ宮殿及びヴェルサイユ宮殿資料室関係者各位に深謝の意を表明する。

付記

本研究は平成 29 年度大妻女子大学戦略的個人研究費（S2919）の助成を受けたものである。

引用文献

- [1] 榎本恵子「ヘラクレスに象徴されるルイ 14 世」『人文学報』、首都大学東京人文科学研究科紀要『人文学報』2018 年、No. 514(15), p. 309-325.
- [2] Christian Biet, « Les monstres aux pieds d'Hercule. Ambiguïté et enjeux des entrées royales ou l'encomiastique peut-elle casser les baroques ? », *XVII^e siècle*, no. 212, 53^e, 2001, p. 391.
- [3] この絵は『アンリ 4 世治世のゴールの歴史』第 18 巻の中扉の絵であるが、ルイ 14 世に上梓されたものである。2016 年 12 月 14 日から 2017 年 3 月 17 日までマザリーヌ図書館の展示会で展示されていた。
- [4] ピーター・パーク『ルイ 14 世 作られる太陽王』名古屋大学出版社、2008、p. 72.

(受付日：2020 年 3 月 29 日，受理日：2020 年 4 月 13 日)

榎本 恵子（えのもと けいこ）

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科専任講師

パリ第4（パリ＝ソルボンヌ）大学フランス文学・比較文学科博士過程修了（博士，文学）

専門はフランス17世紀演劇。現在フランス17世紀喜劇，ヴェルサイユの祝祭，ルイ14世のイメージ製作に関する研究を行っている。

主な著書：『毎日1文 筆記体でフランス語』（単著，白水社），『混沌と秩序－フランス十七世紀演劇の諸相』（共著，中央大学人文科学研究所研究叢書60号），『フランス17世紀演劇事典』（分担執筆，中央公論新社）